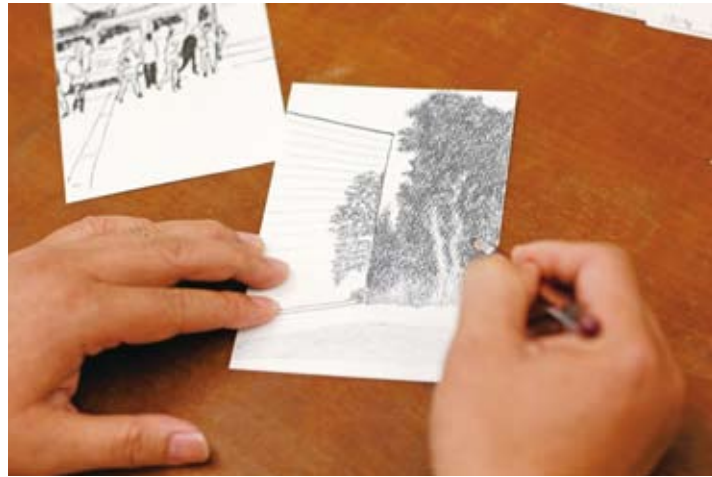




季節や情景などを切り取るスケッチは「俳句の世界に近い」と言う。



石丸氏が描いているのは「グリコハウス」。大きなヤマモモの木と建物に写る影を鉛筆で表現。建物全体でなく、独特の視点で風景を切り取る。



「グリコハウス」建築時、現地の御座白浜海岸を散歩しながらスケッチ。周辺の風景からインスピレーションを得て、家づくりに反映させる。石丸氏はたいてい黒の鉛筆またはサインペンを使う。「色をつけなくても色を感じてもらえたらすごいですよね」と話す。

「スケッチは、場所を見つめる手段。すべてが建築につながっている。」

建築家の
off time
#228

心のバランスを保ち、建築にもつながるスケッチ

「建物だけじゃなく、ロケーションの中に空間をつくるのが大切。ここについて楽しい。そう思える家じゃない」と語るのは、前ページの「グリコハウス」を手がけた石丸信明氏。建築家のエゴやデザインの押し付けをせず、その場所に敬意を払い、ここにしかないものを生み出すことをモットーとしている。

建築家という仕事をしていると、施主との関係や予算、期限などに、常に気を配らねばならず、負担を抱えることが多い。それゆえ、精神的バランスを保つ方法として、石丸氏は絵を描くことを日課としている。気持ちをリセットし、心のバランスをとってくれるそうだ。氏にとってスケッチは、「場所」をみつける手段でもある。身近にある気配や空気など、さまざまなものが凝縮されており、それらすべてが建築につながっているという。

心が動くことに素直に、内面や中身を描く

25歳のとき、建物を見に行くことを目的に、一人でヨーロッパへ。100日にわたり、ヨーロッパの国々を旅しているとき、スケッチ

をはじめた。もともと絵が好きだったこともあり、目に留まった建物や風景を描くうち、自分の内面のイメージとピタッと合う時間を求めて描くようになった。

帰国してから22年間、絵を描くことから遠ざかっていたが、47歳のとき、久しぶりにスケッチブックを持ってパリへ向かった。長い空白のときを経て描いた絵は、若かりし頃とは風景の切り取り方やタッチがまるで違うものだった。「建築をしていると、違うものが見えるようになっていたんです」と石丸氏。

以後、意識的にスケッチをするようになり、国内外のお気に入りの画家の作品を観ることでインスピレーションを得て、自分が表現したいことをトレーニングしている。「言葉にできないものを取り入れ、それを伝える手段が絵です。ただそこにあるものを描くのではなく、内面や中身をも描き出す。「人生、時間、光の移ろい」。それを表現してこそおもしろい」と柔和な笑みで話す。

絵を描くことは、石丸氏にとって建築とは切り離せないこと。「素直に感じる感性を大切にしたい」という思いを持ち、絵も建築も感じたまに表現していく。

※石丸氏のスケッチはスケッチブックとして氏のホームページで見ることができます。

建築家の視点

Architect's eye



石丸信明

1957年兵庫県生まれ。1979年大阪大学工学部建築工学科卒業。安藤忠雄建築研究所を経て、1993年ARX KOBE(現・アークスコープ)を設立。
<http://www.arxkobe.com>

御座。その不思議な名前前の場所に、以前何度か訪れ、私自身魅了されていた。志摩半島の先端に位置し、黒潮が接近する。もちろん本土ではあるが、太平洋と英虞湾に挟まれ、まるで沖縄のよう。潮や天候などの自然が、人間に圧倒的に関わってくる。御座は台風銀座。強風による吹き上げや雨水、塩害により建物のダメージが想定される。技術的な問題を工事の方とも検討。今回新たに、構成要素が均一構造であり、塗料表面に付着した汚れが落ちやすく、その効果が長いナノ技術を使った塗料を採用。何度かの打ち合わせを経て、H夫妻のアメリカに住んでいた頃の話しを聞きながら、望まれている建物は、住宅、別荘、セミナーハウスの機能が混然としたようなものであるとわかった。この建物の内部空間も外部空間も、訪れた人の意識に関わり、すこし前向きになったり、落ち着いたり、或いはそこにいる人の佇まいから気持ち解放されるような居場所がある建物になればいいと考えています。



25歳のときのヨーロッパ旅行で立ち寄ったイタリアのヴェネチアにて描いた作品。当時は色をたくさん使用していた。